

空海の唐文化将来についての二、三の考察

沢 昭 夫

(一)

延暦廿三年、空海は第十一次遣唐大使藤原葛野麻呂に随行し長安に入り、入唐歲月二年にて帰朝(大同元年)する。その間、真言密教を受学し将来するが、その大略は、「奉勸諸有緣衆応奉写秘密藏法文」(性靈集巻九)に示され

貧道雖愚陋。承訓先師。貧道遠遊大唐。求訪深法。幸得遇故大広智三藏。付法弟子。青竜寺法諱惠果阿闍梨。受学此秘密神通最上舍剛乘教。和尚告曰。若知自心。即知仏心。知仏心即知衆生心。知三心平等。即名大覚。欲得大覚。应当学諸仏自証之教。自証教者。所謂。金剛頂十万偈。及大毗盧遮那十万偈經是也……従法身如来。暨我大広智三藏和尚。師々伝授。於今六葉。仏法深妙。只在此教也。欲証菩提。斯法最妙。沙当受学自学。々他者。貧道。謹承教命。服勤学習。以誓弘揚。……

とある。しかるに、唐朝に真言密教が伝播するのは金剛智三藏の入唐した開元七年のことである。後、皇帝の寵愛を受けけるに至る様相は宋高僧伝等に詳しい。それによると空海入唐の徳宗・順宗の時代に於ても仏教は手厚くもてなされたことがみえ、密教もかなり篤信されていたと思われる。空海の将来により密教はさらに東漸するが、その将来が単に密教の将来にとどまらなかつたのは周知のごとくである。空海は実に多様の文化を日本に将来し、弘仁期の嵯峨帝との遊交は唐朝文化伝播の開花を見ると言っても過言ではない。そこで空海の入唐を通して将来文化をより明瞭に

するために唐朝の文化要因を考慮するならば、空海の入唐した順宗年間は、倦疲に満ちた時代といえるであろう。すなわち韓愈の永貞行（朱文公校昌黎先生集卷三）には

君不見太皇亮陰未出令、小人乘時偷国柄。北軍百万虎与貔、天子自将非他師。一朝奪印付私党、懷懷朝士何能為。狐鳴梟噪爭罽毼、陽睖跳踉相嫵媚。夜作詔書朝拜官、超資越序会無難。公然白日受賄賂、火齋磊落堆金盤。

元臣故老不敢語、昼臥涕泣何洑瀾。董賢三公誰復惜、侯景九錫行可歎。……

とあり、又、唐国史補 中卷 には

王叔文以度支使。設食于翰林中大会。諸闈袖金以贈明日。又至揚言聖人。適于苑中射免上馬如飛。敢有異議者。腰斯其曰。乃丁母憂。

とある。まさに私腹を肥やす利己的な政策（禁軍を奪う計画・官職の私的な授受・賄賂の横行等）が行なわれ、王権文等によって政治がないがしろにされていた。それに逆らえばたちどころに腰斬されるという有様であった。又、当時の長安士女の奢侈は驚愕すべきものがある。西溪叢話 上巻 には

元和中京師貴游尚牡丹^⑨。一本直数万。

とあり、唐国史補 中巻 にも同様に

京城貴遊尚牡丹三十余年矣。每春草車馬若狂。以不耽頑為恥。執金吾鋪官圍外寺。觀種以求利一本。有直数万者。

とあり、又同書 卷下 には、

長安風俗自貞元侈于遊宴。其後或侈于書法図画。或侈于博奕。或侈于卜祝。或侈于服食。各有所蔽也。

と、徳宗年間の奢侈を指摘している。この風潮は文章体にまで及んだとみえ、同書 下巻 には、

大抵天宝之風尚党。大曆之風尚浮。貞元之風尚蕩。元和之風尚怪也。

と認めうる。空海の入唐した長安にはまさに倦疲の臭穢を窺い知ることが出来る。しかるに、ここに反動として新文

化勃興の歴史的必然性を認めることが出来る。すなわち、韓愈・柳宗元等の古文復興・新儒学運動、啖助・陸質等の春秋学、李翱等の宋学の基となる世界観、さらには、韓愈・柳宗元・劉禹錫・元稹・白居易等の文人政治家の抬頭はその一端を窺わせる。一方、天寶の乱後揚炎等の税制の改革が施行され、経済に小康を得たと雖もやはり、前述の奢侈を考えれば、決して安定したものであったとは断言出来ない。池田温氏の「中国古代物価の一考察(二)」によると、当時はかなりインフレの状態にあったことを窺い知る。しかるに空海の入唐生活も、この不安定な社会状態の中で送らねばならなかったことは、かなりの辛苦があったと推測しうる。「与越州節度使求内外経書啓」(性靈集卷五)は

空海。年輩若。長躡水。器則斗筲。学則載盆。雖然。哭市之悲日新。歷城之難弥篤。思欲決大方之教海。灌東垂之亢旱。遂乃。奔命広海。訪探真筌。今見於長安城中。所写得。経論疏等。凡三百余軸。及大悲胎藏金剛界等大曼荼羅尊容。竭力。涸財。趁逐凶画矣。然而。人劣教広。未拔一豪。衣鉢解紛。……………

とある。即ち、長安にて資財をつくして求めたけれども、密教は広義で未だ一豪も抜きでいない。しかも是、越州に於て資財はつきはて、人を雇うことも出来ない。従つて寢食わすれ、書写に励むとある。二十年を期した留学生生活も二年足らずで貧困をきたす。延喜式卷卅 大藏省の入諸蕃使の条には、留学生・留学僧に絶四疋・綿二十屯・布十三端と贈賜されたことがみえ、いかに日本國の求法講学に対する援助金が少なかったかを窺い知ることが出来る。桑原隲藏博士は「大師の入唐」^⑥の中でこの点を指摘しておられる。しかし、かく明言するには一抹の不安が残る。なぜなら空海の将来は実に多大で広範圍に及び、請来目録に示される密教関係だけでも夥しいものがある。当時の經濟の動向を考えるなら、これに投入される資財は龐大なものであつたはずである。その将来品の龐大であつたことは「献雜文表」(性靈集卷四)に

右伏。承昨日進止。随探得。且奉進。所遺表啓等。零在他処。今見令人覓。取来則馳奉。

と、将来品が他処に散在しているために、急に帝の命に応ぜられず、一部を奉獻し、残りを探し求めていることが見えるのは、空海の将来の程を窺うに充分である。前述の「与越州節度使求内外経書啓」に示される内容は、むしろ請

来目錄中に示される空海の求法過程と考えあわせれば良いのではないかと思われる。即ち、空海が惠果と邂逅してより、未聞の出世をとげ、わずか半年にて密教の奥儀を秘伝され、惠果と死別する。遺言に、「日本国に帰り、国家の為に密教を奉ずべし」といわれ、帰朝を決心する。そこで空海は日本国に少しでも多くの将来を考え、必要経費を除く余財は全て将来品に投入したと考えられる。そして帰路につき、明州・越州に至るが、固より求法に真摯である空海は、長安にて求め得なかったものを、この地にて発見し、書写してでも将来せんとする。そこで書かれたのがこの啓であるから、越州にては恐らく必要経費をもきりきざんであつたものと思われる。従つて、越州にては必要経費しか持ちあわせていなかったのであるから、この啓は空海の貧困を云々するよりむしろ空海の密教に対する真摯な態度を窺わしめるものと考ええる。又、「円仁入唐求法巡礼行記」開成四年二月廿七日の条に

齋後。本国使賜留学僧東繩卅五疋・帖綿十疊・長綿六十五屯・砂金廿五大兩。宛學問祈。朝貢使賜勾当王友真酒飲。惜別。

とあり、又、会昌元年四月卅日

の条に 真和尚教化俗人。助加絹卅六尺。賜宛画絹。

とあり、又、同年五月一日の条に、

深謝、和尚教化賜絹卅六尺。宛画功德。慈縁殊深。

とあるよりその援助を窺う。この例を考えるならば、空海は惠果の直弟子であつたから、より一層の援助、保護があつたと思われる。又、円仁と同様、空海も長安で藤原葛野麻呂と惜別するにあたり、何某かの贈賜があつたか否かは判然としない。しかし、空海帰朝後葛野麻呂の一族の為に凶像を奉る願文が二、三みえ、その親交の深さよりあるいは想像出来なくもない。一般に留学生・留学僧も生活は決して楽ではなく、円仁もその例外ではない。特に橘逸勢の場合は悲惨をきわめる。「為橘学生与本国使啓」(性靈集卷五)にはその実情を述べている。いづれにしろ、日本国から支給されるものだけでは二年の歳月をもたすことも出来ぬ様であつたことを窺う。空海も決して楽ではなかつた

にしる、夥しい将来品を中唐の経済の中で考えるとき、恵果の保護を抜きにして考えることは出来ない。従つて空海の入唐生活は他に比してまだめぐまれていたと思われるのであり、逸勢のように決して赤貧に身を挺することはなかったと思われる。

(二)

空海の入唐の成果は文化の将来にある。請来目録には密教伝播の成果をみることが出来る。その中に図像は一段と極まった存在である。唐代に於て、特に絵画が世界的にすぐれていたことは人口に膾炙し、空海の将来図像もその例外ではない。請来目録に

則喚供奉丹青李真等十余人。図像胎藏金剛界等大曼荼羅等一十鋪。

とあり、李真等によつて作像されたことが認められる。供奉丹青とあるから李真は供奉博士であつた。供奉博士とは一材一芸に秀でた者を内庭に供奉させ、それを従官の異称としたもので、供奉博士と称する者は、当時の各部門において、水準をはるかにうまわるスペシャリストであつた。従つて李真は丹青（絵を善くする）に於て秀でていたわけである。しかし、文献の上に李真について書かれているものはない。わずかに「酉陽雜俎」続集卷六寺塔記下に

李真周防優劣難

とあるのみで、詳かなことはわからない。しかし、空海の将来した李真の画が極めて優秀であるか否かを問題にする時、この資料の信憑を問わねばならない。従来李真について研究されたものはない。わずかに空海の将来図像にふれて、すぐれていると出て来るのみで具体的には示されておらない。

本来、唐代の一流画家であれば、歴代名画記か唐朝名画録にその略伝が附されているはずであるが、李真はそのいずれにも記載されていない。一方、優劣をきめ難しとされた周防は、唐代を代表する一流画家であつた。すなわち、唐朝名画録には、吳道玄に次いで神品に列し、歴代名画記 卷十 には、

周防字景玄。官至宣州長史。初効張萱畫。後則小異頗極。風姿全法衣冠。不近閭里。衣裳勁簡。彩色柔麗。菩薩端嚴。妙創水月之體。

とあり、初めは張宣の画を効い、後には小異頗極し、菩薩を描いてはその像端嚴にして、妙にも水月の体を創るとある。いわゆる水月観音で、敦煌発見の図をはじめ、後世これを範とするものは少なくない。歴代名画記卷三に

塔東南院周防画。水月観自在菩薩掩草菩薩。円光及竹。並是劉整成色。

と彼の水月観音の図像を認め得る。又、周防は人物画にも優れていた。宣和画譜卷五、人物敘論中に、

自吳晉以来。号為名手者才。得三十三人。其卓然可伝者。則……唐之鄭虔周防。

とあり、鄭虔・周防を唐代の人物画の名手として認めている。画継卷八の銘心絶品の項には

文正公孫李 大觀家

周防號国夫人図

と、周防の人物画を銘心絶品にあげている。宣和画譜卷六 周防伝末には御府所蔵七十有とあり、その中に士女図を数多く認められる。伝中に、

防画婦女多。為豐厚態度者。亦是一蔽。此無他。防貴游子弟見。貴而美者。故以豐厚為體。而又閨中婦人纖弱者。為少。至其意穠態遠宜覽者得之也。

と、士女図を説明している。又その絵が多く新羅人にとって帰られた事が、宣和画譜と同様、図画見聞志に認めることが出来るのは、周防の画跡を窺い知る。この周防と双壁とされる李真の画跡は西陽雜俎続集卷六寺塔記下に

睿宗聖容院門外……庫院鬼子母。貞元中李真画

とあり、又同巻中に、

团塔院北堂有鉄観音。高三丈余。観音院兩廊四十二賢聖韓幹画。元中書載贊。東廊北頭散馬。不意見者如將嘶蹠。聖僧中菴商邨和修絶妙。团塔上菩薩李真。

とあり、韓幹と同じ団塔院に図像があることが見える。韓幹はここにも見られるように馬の絵を善くすることは唐代一流で、いずれの書も一様に記している。後世からもその優れていることはたたえられ、例えば冷斎夜話 卷八に

李伯時善画馬。東波第其筆。当不減韓幹。

とある所より明らかである。従って時代の相異はあっても、韓幹の図像を汚すことのない力量が李真にあり、李真に図像することを命ぜられたと考えられる。例はなす他にも見出し得る。歴代名画記 卷三、両京寺觀等画壁の項に

唐安寺塔下。尹琳李真画

北円塔下。李真尹琳絹画菩薩。

と、李真の図像のあったことを認め得る。この同塔下にある尹琳は、歴代名画記 卷九に、

尹琳善仏事神鬼寺壁。高宗時得名。筆跡快利。今京師慈恩寺塔下南面師利普賢。極妙。李昌・李嗣真竝琳弟子。

竝善仏道鬼神。

とあり、門下に李昌・李嗣真の存在を知る。共に道釈画を良くし、初唐に卓越する画工であった。従って尹琳の地位は容易に想定しえる。即ち、初唐に一門をしめる道釈画の要所であった。この尹琳の図像と同塔に描ける李真の図像は、決して尹琳に劣ることはないと思定し得る。又、その図像に劣るならば決して李真に命を下されなかつたろう。恐らく、中唐の時代にあつて道釈画をえがくにあたつては、一、二を争う位置にいたのではないかとさえ思われる。

呉道玄——周昉——李真

韓幹——李真

尹琳——(李昌・李嗣真)——李真

と結べば、中唐期に道釈画を善くした李真が明瞭になる。したがって、西陽雜俎にみえる

李真周昉優劣難。

は、他の二例と比較推測するなら、あながち誇張された記事とはいいきれなく思われる。唯、李真伝が、何処にも列せられていないのには疑問が残るが、或いは、李真が道釈画にとどまるきわめて地味な画士であったため、画跡のみ記されて略伝が記されなかったのかも知れない。しかし、それがために、李真の図像が優れたものでないとはいえない。むしろ前述の諸点より、李真の伝が書かれていないのは遺憾とせねばならない。従って、空海によって日本に將來された李真の筆になる図像が単に優れたものではなく、多くの将来品の中においても、秀逸であったことを認めることが出来る。請来目録の仏像の項に示される

大毗盧遮那大悲胎藏曼荼羅一鋪 大悲胎藏法曼荼羅一鋪 大悲胎藏三昧耶略曼荼羅一鋪 金剛界九会曼荼羅一鋪
金剛界八十一尊大曼荼羅一鋪 金剛智阿闍梨影一鋪 善無畏三藏影一鋪 大広智阿闍梨影一鋪 青竜寺恵果阿闍梨影一鋪 一行禪師影一鋪

などの一連の作は、李真等十余人の作であることは前述の請来目録の記述で明白である。今日唐代の図像が伝存されることの少ない中において、真言五祖像を京都教王護国寺に秘蔵するのは極めて価値のあることであり、空海によってなされた将来品が、今日なお、唐代の文化遺産を窺う上に貴重であることは言をまたない。

同時に又、請来目録に示される

又喚供奉鑄金博士楊忠信趙具等。新造道具一十五事。

は、図像と同様に極めて優れていることを容易に類推しえる。従って空海請来目録に見える密教の品々は、唐代密教の珠玉の芸術を伝播していると考えられる。これには空海の恵果阿闍梨との幸遇を基となし、わずか一年たらずで、恵果の死に碑文「大唐神都青竜寺故三朝国師灌頂阿闍梨恵果和尚之碑」(性靈集卷二)を書く榮譽にあずかるに至る恵果との師弟の親交を抜いては考えられない。空海は恵果を通して、李真との交遊を得たとも考えられる。密教の弘揚と合せ考えると、李真より図像法を伝授されたのではないかと思われる節もある。いずれにしろ、この将来は空海の天才性と恵果との邂逅の結晶であることには間違いないことである。

空海の文化将来の特色は密教の範疇に止まるものではない。後世、大師流の始祖と仰がれ、三筆の一人に数えられる空海の書道は見るべきものがあり、ここにも入唐の成果をうかがうことが出来る。特に帰朝後、書道を通じての嵯峨帝との遊交の深さは、真言密教弘伝との相関の上に立つ一面を、結果としてみることが出来る。即ち、性靈集中隨所に嵯峨帝に哀訴する空海の姿は、処世のうまさや文化交流の間隙に加味しているように窺える。この卓越した処世術の先鋒と成り得た書道について、空海は実に深い造詣を持っていたように思われる。古来より、中国・日本に於いて書の主軸をなしていたのは王羲之の書風であったことには衆目の一致をみる。空海も入唐前にはすでに、王羲之の体は学んでいたと思われるし、同時に書道に関する典籍をかなり読破していたと考える。日本国見在書目録・隋書經籍志・両唐書經籍芸文志に示される書道の典籍より一端を窺うならば、日本国見在書目録(小学)中に

書林五卷・書譜三卷孫過庭撰・書斷三卷・筆勢集一卷尺希撰・筆勢論一卷王羲之撰・書評一卷・用筆陳面碑一卷王羲之撰・古今五十四種書体様一卷・古今篆隸文体一卷蕭子良撰・字様一卷顔貞卿撰・字様一卷戴行方撰・字様一卷顔師古撰・東台字様一卷・干祿字様一卷・波斯国字様一卷

が認められる。同様に隋書經籍志には

古今奇字一卷郭頭卿撰・六文書一卷・四体書勢一卷晉長水校尉衛恒撰・雜体書九卷韋正度撰・古今八体六文書法一卷・古今篆隸雜字体一卷蕭子政撰・古今文等書一卷・篆隸雜体書二卷・文字図二卷・書集八十八卷晉散騎常侍王履撰・書林十卷

を認めうる。旧唐書經籍志中には

古今八体六文書法一卷・四体書勢一卷衛恒撰・飛龍篇篆草勢合三卷崔瑗撰・聖草章一卷蔡邕撰・五十二体書一卷蕭子雲撰・古篆隸詰訓名録一卷・書品一卷庾肩吾撰・書後品一卷李嗣真撰・筆墨法一卷・鹿紙筆墨疏一卷

を認め得る。唐書芸文志(旧唐書記載は除く)中には

徐浩書譜一卷・古跡記一卷・張懷瓘書斷三卷開元中翰 林院供奉・張懷瓘評書葉石論一卷・張敬玄書則一卷貞元中 廼士・褚長文

書指論一卷・張彥遠法書要錄十卷弘靖孫 乾符初大理卿・裴行儉草字雜體・荆浩筆法記一卷浩稱洪 谷子・二王張芝張昶等書一千

五百一十卷太宗出御府金帛購天下古本 命魏徵 虞世南 褚遂良定真偽 凡得幾之 真行二百九十紙 為八十卷 又得獻之 張芝等書 以貞觀字為印草跡 命遂良楷書小字以影之 其古本多梁隋官書 梁則滿籀 徐僧權 沈熾文 未異 隋

總 姚察署記 帝命魏 褚卷尾各署名 開元五年 敕陸玄 王氏八体書範四卷 王氏工書狀十五卷 煥 魏哲 劉懷信檢校 令益卷帙 玄宗自書開元字為印

をあげることができる。書名にて判断したため誤りを犯しているかも知れぬが、空海は、入唐前・中・後を通じて、これらの多くを時節にふれ読んだであろうことは容易に想定しうる。性靈集卷三、四に示される書道に関する一連の表は、空海の書道観を簡潔明瞭に示し、同時に入唐中に学んだ書法・技術等を窺い知る。即ち「敕賜屏風書了即献表」卷三に、

古人筆論云。書者散也。非但以結裏為能。必須遊心境物。散逸抱懷。取法四時。象形万類。以此為妙矣。と、蔡邕の筆論を引用し書の境域を附している。「猷覺字并雜文表」卷四には

茶湯坐來。乍閱振旦之書。每見蒼史古篆。右軍今隸。務光韭葉。杜氏草勢。未嘗不野心忘憂。山情含笑。と鑑賞の態度の一端を窺う。又「猷東太上李邕書迹表」卷四に

九丹写其一。八体篤其風。空海。以得此妙迹。時充披翫。隆匠不及四隨。而功夫施於一時。

と妙迹の披翫を説いている。此の書道観の背景となり得たものは「書劉庭芝集奉猷表」卷四に見える骨法であると思われ。すなわち、

余於海西。頗閑骨法。雖未画墨。稍覺規矩。

である。入唐して骨法（筆骨書法）いわゆる筆力を学んだことに於て、書の精神を一貫していると思われる。性靈集中に「鶴頭龜爪」・「跳竜返鵠」・「鑿者不写。々々不鑿。々者興來。則書遺其奇逸」とあるは骨法を意味した言葉である。唐の太宗に於ても

太宗嘗謂朝臣曰。吾臨古人書。殊不学其形勢。惟在求其骨法。（唐会要）

と示されている。蔡邕の筆論と考え合せれば、自ずと空海の書観は性靈集中に明瞭にあらわれていると思われる。

空海は性靈集の書に関する表の随所に「緇林朽枝。法海爛屍。但解持鉢以行乞。吟林藪而住觀。寧有現鬼墨池之才。跳龍返鶴之芸。」・「久闊翰墨。志深画一。安神余隙。時探云書之秘奧。持觀之暇。数檢古人之至意」・「自外凡庸。何解点画之奧。何況空海。耳聞其義。心不存理。空費筆墨。」・「心遊仏会。不遊筆」・「弃置心表。不鹵鑿写。」といった一文を見る。即ち心は常に禪上にあり、わずかの余暇に書を学んだので、己の筆墨の空しいことが書かれてあるのだが、これは嵯峨帝への謙讓であり、空海の書に対する情熱は決して稀薄なものではない。なぜなら、わずか一年余の入唐生活で数多くの書蹟並びに技術を将来しえるのは、並々ならぬものがあつたからであり、まして豊かだといいきれない留学生活の中から、書に対して多くの費用をかけたというのは推して知るべきである。性靈集中にその将来品をたずねるならば「奉獻雜書迹状」巻四に、

徳宗皇帝真跡一卷・歐陽詢真跡一卷・張誼真跡一卷・大王諸舍帖一卷・不空三藏碑一卷・岸和尚碑一鋪・徐侍郎宝林寺詩一卷・釈令起八分書一帖・謂之行草一卷・鳥獸飛白一卷

「献梵字并雜文表」巻四に、

古今文字讚三卷・古今篆隸文体一卷・梁武帝草書評一卷・王右軍蘭亭碑一卷・曇一律師碑銘一卷・草書・大広智三藏影讚一卷

「献東太土李邕書迹表」巻四

李邕真跡屏風書一帖

を挙げ得る。空海の将来は単に真蹟、搨書等の書蹟の将来ではなく、書道の多種にわたる技術の導入に見るべきがある。即ち「書劉希夷集献納表」巻四には

貞元英傑。六言詩三卷。元是一卷。緑書様大。卷則随大。今分三卷。文是秀逸之文。書則褚臨王之遺体也。比属。臨池之次。写得奉上。

とあり、書は褚臨王の遺体也と明言するあたり、揚書・臨書の様式を得ていることを窺い知る。「奉獻筆表」巻四に自外。八分小書之様。踴書臨書之式。雖未見作。得具足口授耳。

とあり、隸書八分の書体や小さな字体用のものの様式、揚書・臨書の模写の様式の口授を得たことが見える。空海は入唐中にその要を聞き、六言詩三巻に試みたことを窺い知るのである。唐に於ては、太宗の王羲之の溺愛より、書の隆盛を^⑤あり、揚書・臨書がさかに行なわれ、宗室や功臣はこの書を賜わった。唐六典巻八の弘文館士の条には揚書手が存在する。又東鑑余論上巻に「論臨摹二法」がありその技術が記されている。

世人多不曉臨摹之別。臨謂以紙在古帖旁。觀其形勢而學之。若臨淵之臨。故謂之臨。摹謂以薄紙覆古帖上。隨其細大。而揚之。若摹面之摹。故謂之摹。又有以厚紙覆帖上。就明牖景而摹之。又謂之響揚焉。臨之與摹二者迥殊不可亂也。

と。次に揚書・臨書に続いて飛白書を記している。即ち、

飛白書一卷。亦是。在唐之日。一見此体。試書之。虎麥為犬。雖未成功。夫比之獻芹。

とあり、飛白の見聞を著し、試みたけれども成功しなかったことが見える。嵯峨帝もこの飛白書には関心があったらしく再び、飛白書の献上の要請をしている。「奉獻雜書迹状」巻四に

鳥獸飛白一卷……謹隨狀謹進。

とあるはそれに当る。飛白は中国に於て夙くから起り、張懷瓘「書斷」巻上飛白に

案飛白者。後漢左仲郎將蔡邕所作也。王愷王愷竝云。飛白麥楷製也。

とあり、祖述・發展させた者に王羲之・王献之・蕭之雲・歐陽詢の名を認む。又同巻中には神品二十五人中に飛白三人を挙げ、『蔡邕・王羲之・王献之』を列し、妙品九十八人中に飛白五人を挙げ『蕭子雲・張広・韋誕・歐陽詢・王廙』を列し、能品一百七人中に飛白一人を挙げ『劉紹』を列している。又、東鑑余論巻上「論飛白法」に

唐太宗飛白亦如此作。皆有豪筆点掃濃淡之勢。而近世相承飛白。皆用相思。為片板若髹刷然以書。殊不用豪筆。

故作字無濃淡纖壯之變。非古也。當蔡邕於鴻都下見士人。以聖帚成字婦而為飛白之書。非使用聖帚蓋用筆効之而已。今人便謂所用木筆。為聖帚謬矣。又云飛而不白。又云白而不飛。蓋取其若絲髮也。謂之白其勢飛拳謂之飛而俚俗嫻語。

とあるより窺い知る。唯中國に夙より飛白が興つても日本には伝わらなかつたらしく、空海も入唐して初めて飛白の書を見たようにしている。とすれば、空海の飛白書將來の意義は大きいと言わねばならない。さらに空海の將來は書道具の作成技術にまで及んでいる。「奉獻筆表」巻四に

於海西。所聽見如此。其中大小長短強柔齊尖者。隨字勢麁細。惣取捨而已。簡毛之法。纏紙之要。染墨藏用。竝皆伝授訖。空海。自家試看新作者。不減唐家。

と見聞を著している。これによると、弘法筆を扱はずの諺の偽りも明白であろう。又、空海は王昌齡とともに劉希夷をも熱愛していたらしく、劉希夷（字は庭芝）集四巻を二度にわたり奉獻しているのは、暗に空海の意向を思わせる。劉希夷は中唐の詩人として名をなし、日本には空海によって將來されたとされ、経国集中の滋野貞主にはこの影響を認めるとされている。^⑩日本国見在書目録別集には「劉希夷集私記一卷」を認めうる。ともあれ、空海は入唐の成果をいかに発揮し、嵯峨帝に数々の献上を行なった。その品々の優秀なることは法書要録等の典籍の調査を俟つまでもなく、性靈集中に如実に示されていると思われる。又、古今著聞集巻七能書第八「嵯峨天皇弘法大師と手跡を争ひ給ふ事」に

「これは唐人の手跡也。其名をしらず。いかにもかくはまなびがたし。めでたき重宝なり」と頻に御秘藏ありけるを、大師よくよくいはせまゐらせて後……大師「御不審まことにその謂候。軸をはなちて、あはせ目を観覽候べし」と申させ給ければ、則はなちて御らんずるに、そのとし其日青龍寺にをいて書之、沙門空海、と記されたり。天皇、此時御信仰ありて、「誠に我にはまさられたりけり。それにとりて、いかにかく当時のいきほひにはふつとかはりたるぞ」と尋仰られければ「其事は国によりて書かえて候也。唐土は大國なれば、所に相応し

ていきほひかくのごとし。日本は小国なれば、それにしたがひて当時のやうをつかうまつり候也」と申させ給ければ、天皇おほきに恥させ給て、そのくちは御手跡あらそひなかりけり。

とあるより空海の書が国土・風土によつて変化することまでが説かれ、その深淵なることは、まさに驚くべきものといえる。晩年、嵯峨帝の書風が空海に似るのはこの故事によるものか、ともあれ、空海の書道は性靈集にても一端を窺うに充分である。

結びにかえて

空海の入唐生活の状態を当時の社会状態と相關する時、他の留学生・留学に比して恵まれていたと断じるのは、恵果阿闍梨との幸遇に寄ると考える。しかるに、日本国にもたらされた夥しい将来品は、この恩恵の中に求められる。ここに論じた図像・書蹟・書法・書道具の製作技術は長安の生活によつてはぐくまれた。図像に於ては、今日明らかにされていけない李真について言及を試みたが、資料の伝存されていけない人物だけに些かの危惧をまぬがれ得ない。新たな資料の発見を俟つて再び李真を明らかにせねばならない。空海の将来図像を単にすぐれているとのみ言うのではなく、李真を唐朝の画史に位置づけせねばならない。それにより空海の影響は明瞭となる。

一方、書道に於ては、修山脩一氏が「性靈集より見たる弘法大師」で書風の大様を論述されている。従つてこの論文では、氏のふれられておられない点(骨法・飛白)を中心に中国の文化をさぐりながら将来に要点を置いた。空海の将来を考える時、一言して撰択眼の卓越している点を指摘しうる。この空海の天才的な識別能力は、平安前期の一区画をなす弘仁期に精鍊された中国文化を移植したのであった。ここに弘仁期は中国文化の上に重要な意味を持ち、より精密な研究がなされねばならない。その意味に於て、空海は多くの問題点を含蓄するこの期の代表的人物と言わねばならない。

註

- ① 宋高僧伝卷一ノ洛陽広福寺金剛智伝ノ同卷一ノ唐京兆大興善寺不空伝ノ、同卷五ノ唐中嵩陽寺一行伝ノ。釈氏稽古略卷三。仏祖統紀・仏祖歴代通載など参照。
- ② 性靈集、卷三・卷四に見える表。
- ③ 当時中国に於て牡丹を尚ぶことが流行した。特に西明寺の牡丹は有名で、元氏長慶集ノ卷十二(西明寺牡丹)・元氏長慶集ノ卷九(西明寺牡丹花時憶元九)同卷十六(重題西明寺牡丹)が有名で数多くの詩人に読まれている。全唐詩十三劉禹錫(賞牡丹)同十八徐凝(牡丹)同二十六崔道融(長安春)・徐夤(憶薦福寺南院)・王叔(牡丹)、又西陽雜俎等にも見える。
- ④ 史学雜誌七七一・二。
- ⑤ 桑原隲藏全集卷一所収。
- ⑥ 入唐求法巡礼行記。会昌元年四月十五日慈覺大師伝、中円仁青竜寺在住の時代。
- ⑦ 逸勢：日月荏苒。資主都尽。此国所給。衣糧僅以続命。不足東修読書之用。若使。専守微生之信。豈待廿年之期。非只軫屢命於墜。誠則。国家之一瑕也。とある。
- ⑧ 修山脩一ノ性靈集より見たる弘法大師の書道ノ佐賀大学論文紀要一、に大要が示されているが、未言及の点を残すのは憾みがある。
- ⑨ 通典、職官考選舉志下、中に官吏登用に明字をかすことが見える。
- ⑩ 修山脩一、前掲。
- ⑪ 小島憲之ノ上代日本文学と中国文学ノ下

(65頁より続く)

ない。また、ある日の授業では、大学院前の芝の上に車座となつて、歴史学や大学について語り合ったこともあつた。大教室での授業が多かつた一年次の一般教養課程にあつて、このように先生と親しく談笑できたのは、私達には嬉しかつた。我々の若い黒髪に囲まれて白髪の頭を初夏の緑光に輝かせながら、あの温和なお顔で、「君達も一度中国へ行つてみるとよいのだが……」と青春の頃を思い出しておられたのか、いともこやかに話して下さつた先生の姿が、なつかしく思い出される。

三年次になつて、再び先生に教えを受けた史料講読の授業は、僅か二か月で休講となつてしまつたが、思えばあの六月八日「支那通史」武章の禍の章を講読されたのが、私には最後の授業であり、最後のお姿となつてしまつた。私達三年生も一度お見舞いにも思いつつも、ついつい日が過ぎてしまひ、図らずも今こうして先生の柩を野辺に送ることとなつてしまつたのが、ただ残念でならない。また、私達三年生が史学科に入学して初めて手にした『史泉』三十七号に先生は故石浜純太郎先生の追悼文を載せておられる。それが今は先生の追悼の文を書くことになつてしまつた。残念である。今はただ私達関西大学史学科そして東洋史学の発展を浄土より御護り下さいますよう祈念しつつ、先生の御冥福をお祈り致します。

昭和四十五年十二月六日、雑木林の丘陵の小さな墓地に向われし先生の柩に合掌しつつ。